

淨土

1980-5

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別郵便）
昭和五十五年四月二十五日印刷
第四十六卷
第五号
海内一回一日発行
三二五号
日発行



善導大師一千三百年遠忌慶讃記念号

入試問題について一言

本年も入試シーズンはずでに終わったが、一番世間をさわがせたのは、早稲田大学の入試問題が外部にもれたことです。入学試験も入

試対策といわれるように、対策という言葉がつかわれている間はいいのですが、これが戦争という言葉を使いだすと、もう手のほどこしようがありません。すなわち現在、まさに入試戦争の時代です。

第二次大戦後、大学の進学率が上昇し、大学は全ての面で、質より量的な面で発展して来ました。大学教育の大衆化が行われ、国、公私立の区別なく画一化してしまいました。まあこれも一面では、大学教育の大衆化、全般的な知的水準の向上といった面では役に立っています。こうした問題の解決は、量から質への転換ということですが、文部省が私学助成をしてい

る現在、定員等の制約もきびしくおのずから量から質に変わって来ます。現在では、高等学校の数の割には大学がすくない、また進学率のたかい割には大学はすくない。ここに入試戦争がおこり、入試産業が盛んになっているのです。

とくに私立大学においては、最も大切な建学の精神をいかに教育面に浸透するかという重大な問題があります。これは大学側がカリキュラムの上で配慮し、創意工夫する以外にないと思います。ことに仏教、キリスト教、神道等、宗教学の大学においては重大な問題であると思います。キリスト教系の大学で、もうすでに神学科を廃止してしまった大学もあります。その大学は何の目的で創立されたのか創立の意義を疑いたくなる大学もあります。大学の構成員である、理事、教職員の自覚の問題であると思います。圧倒的に多い私立大学は、それぞれに強い個性を持つことであり、選択に備える魅力ある学問の場を創ることであると思います。

(佐藤行信)



五月号



行者まさに知るべし。もし解を学
せんと欲せば、凡より聖に至り、
ないし仏果まで、一切無礙に、み
な学することを得よ。

——『選訳本願念仏集』

(定本法然上人全集1 P.116)

目 次

特集 善導大師一千三百年

- 遠かりし終南山への道(三)……………稲岡 寛 順 ……(2)
- 六時礼讃「無常偈」によせて……………鷹 司 誓 玉 ……(5)
- 日中友好のかけ橋
- 善導大師の遠忌と鑑真和上像の里帰りによせて…宮 林 昭 彦 ……(9)

法 話

- 仏に遭えるとき……………吉 田 嘉 雄 ……(14)

特 別 寄 稿

- 法然上人『勅修御伝』の英訳について(二)…石 井 真 峯 ……(18)

- 随想■ 伊豆高原の春—季寄せ—……………木 下 隆 一 ……(23)
- 絆(きずな)【二】

- 誰れがこの子らをそうさせたか——……………森 邦 夫 ……(31)

- 浄土句集……………一 田 牛 猷 選 ……(28)

- 〈表紙のことば〉 鯉……………土 屋 正 男 ……(30)

- 〈表紙裏・巻頭言〉入試問題について一言……………佐 藤 行 信

- 念仏ひじり三国志⑦——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉 ……(37)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部

特集 善導大師一千三百年

遠かりし終南山への道(三)



大本山金戒光明寺法主

稲岡 覚順
いな おか かく じゅん

一 香積寺の整備計画の内容

(1) 境内敷地の整備

十三層墓塔の前には幅約三米位の通路があり、この通路上で昨年も今年も、回向が行われたのであるが、実を言うといかにも狭い。この通路の両側は畑であり、この墓塔と浄業法師の墓塔との距離は、約百米位であるが、両者間は畑であって連絡はない。

この現状に対して、この度示された拡張整備計画は雄大である。

即ち、香積寺は終南山を遙かに南に望む景勝の地にあるが、前方には瀉河と瀉河の合流地点がある。今回の計画では、寺域をこの二河の合流地点まで、拡大するのである。

趙樸初先生曰く「瀉河瀉河の合流地点としたのは、日中交流を意味するのである」と。

敷地の総面積は、約五千坪であり、この広い敷地予定地には、民家あり、学校ありであるが、これらは目下移転計画を進めているとのことである。

(2) 墓塔の修理作業

十三層の墓塔は、善導の弟子懷憚くわいなんによって建てられたものであるが、清の乾隆時代に修理されたと伝えられるが、既に千数百年の風雪に堪えて来た関係から、十三層中上の二層は破損しており、全体に縦の亀裂もあり、今後地震等による破壊の危険もある。然し今見る塔の尖端には赤旗が掲げている。これは修理作業中の標示であるとのこと。私共団員に対して住職は、塔の尖端にあった

棟瓦一枚を贈られたが、何よりの記念である。

趙樸初先生は修理後の塔内には、経巻や舍利を納めたなどの意向を漏らされていた。

善導大師阿弥陀經書写十万巻の故事にならって、浄土宗ではこの修理後の塔内に奉納すべく、全国信徒に対し阿弥陀經書写の運動を起し、多数の協力者を得ていることは意義深い。

(3) 仏殿の建設

香積寺に現存の建物は清の乾隆時代のもと言われ、約二十五坪位の粗末のもので、仏像も仏具もない。今回の整備計画中には、相当規模をもつ仏殿が建立されると聞いていた。『浄土』誌二月号に大正大学の佐藤行信先生撮影にかかる、建築中の仏殿が掲載されている。これは先生が昨年暮れ訪問の際のもので、ここにも趙樸初先生の言明通り、仏殿建立が着々進捗している事実が知られる。

この仏殿には目下日本で製作中の、善導大師の尊像が奉祀される訳で、同時に立派な仏具や荘厳具等も用意され、今はその舟出を待つ状態である。

以上は中国側の好意に基く、香積寺整備計画とその進行状態であるが、この様に彼此呼応して善導大師一千三百年遠忌の準備が進められ、いよいよ本年五月を期して、墓塔前における遠忌法要が行なわれることは、正に空前の盛儀と申すべきである。浄土一宗はいうに及ばず、まことに喜ばしい限りである。

現地法要には一宗主催の訪中団約百名の外、宗議會議員の二団、増上寺雅楽団の参加も予想され、神禾原頭には彼此兩國主腦の、俱会一処が行なわれ、念仏の声高らかに湧き起る場面が考えられ、愉快を禁じ得ない。

二 遠かりし終南山への道

日本浄土教徒にとって、思慕やまざりし終南山への道、あこがれ続けた香積寺参拝、願ひ続けた祖霊との対面、思えばこの道は遙けくも遠かったのであるが、この諸願はここに成満したのである。

一言に彼比兩國の真心と真心とのふれ合い、魂と魂の接触の結果に外ならない。そしてこの好縁こそ、そのまゝ如来のおはからい、祖師のお導きと頂く時、有難き導

きの感慨はつきない。

昨年五月二十七日の夜、趙樸初先生が私の宿舍に來訪の砌り、「善導大師往生千三百年記念」と題する讃詞（長詞）を贈られた。この詩中には先生の大師遠忌事業に対する情熱がこめられている。今その一端を誌させて頂く。

（前略）

爰に勝因を結び、（浄土宗協会設立等）

爰に盛会を興し、（遠忌法要）

師恩をしのび、永久に墜ちざるを誓う、

伽藍ここに開き、（仏殿を建立）

塔波ここに修し、（十三層墓塔を修理）

海潮は像を迎え、天風は舟を送る、（日本から大師尊像

を舟で送る）

南都は雲の如くとけあい俱に一処に会し（兩國共催の

法要を行う）

永久に好を敦くし、ひとしく祖風に慕わん。

（已下略）

（了）

六時礼讃「無常偈」によせて



鷹司誓玉
たか つかさ せい ぎよく

(大本山善光寺大本願副住職)

私が本格的な浄土宗の法要にはじめてふれたのはもう

二十数年も以前、京都東山の尼衆学校（現在の吉水学園）

においてでありました。当時全校生徒は四十人前後であ

ったと思いますが、朝夕の勤行毎に、誓・大鑿・小鑿・

木魚・鉦鈸などの法具を用い、維那役の発声に応じて多

勢の尼僧達が一せいに唱える読経の雰囲気には、美しさ

と迫力がみなぎりふしぎな感動をうけました。ことに礼

讃（六時礼讃とも往生礼讃とも）といわれるものはそれまで

の学校教育で習った声楽とも、趣味でおぼえた謡曲とも

全くことなる発声法で、各文句の字数によりほぼ一定の

曲節がきまっております、伴奏も音譜も指揮者もないのに単

調なようでしかも微妙なハーモニイがありました。ゆる

やかな旋律にはおのづと引きこまれ、ほんの数日後には

私共新入生もごく自然に何の抵抗感もなく同音に唱和しておりました。

むつかしい漢詩の偈頌は早急に深遠な意味内容がわかるわけはありませんが、何となく文字の上から一応の意味が推測され、全身全霊で唱えるたびに言いようもないありがたさを感じたのです。それは日常しらずしらずに自分の犯している身口意の三業の罪、更には無限の過去世から現在に至るまでの数え切れない程の深重なる業障を深くほり下げ、五体投地の礼拝をしつつ告白懺悔して、心を浄化する行法であり、一日に六回（四時間おきではありますが一回の法要に約一時間かかるとすれば、ほぼ三時間毎という事になり、厳密に行えば殆んど寝るひまもなく）昼も夜も連日連夜、劣悪なる凡夫性を内省し、み仏の慈悲教

済を願う心情を素直に吐露した美しくも厳しい詩であります。このような事を思いつつ唱え、礼しつつ味わううちに、一体これ程のものがいつどなたによって作られたのかと関心をもつようになりました。

きけばこれは遠い昔中国の善導大師（六一三～六八一）の御作で、同じく善導大師の著『観経疏』の中の「一心に専ら弥陀の名号を念じ行住坐臥時節の久遠を問わず、念々に捨てざるものこれを正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」とのおことばを啓示の如くおうけとりになった法然上人が、浄土宗を立教開宗され、又夢中に二祖対面して法然上人のとかれる念仏の教えに誤りのない事を証明されたということ、それ故に我が浄土宗では、善導大師を高祖・法然上人を宗祖と称して、ともに心のより処として追慕するのだと承りました。

おろかな浅ましい我が機根を深く反省すればする程こんな私をも見すてずに、否それ故にこそみ仏は慈悲の御手をさしのべていて下さる。罪が重ければ重い程救いとして下さる弥陀の大願業力は広大無辺だという法を信じると——いわゆる信機信法の思想や、至誠心、深心、回向発願心の三心具足の念仏など高祖から宗祖を経て今日に

至るまですべての浄土宗僧の信仰の根幹となって居ります。しかも私ひとり救われたいというのではなく一切衆生ともろ共に救われたい「願共諸衆生往生安樂国」という限りなく広く深い人間愛は、世界的規模においてさまざまな危機感のある現代に生きる私共の切実な心情でもあります。

六時礼讃の偈頌についてくわしく申しますと、日没は善導大師が『無量寿経』の光明歎徳章から作られたもので、初夜は東方仏国讃により、中夜は竜樹の十二礼により、後夜は世親の願生偈により、晨朝は隋彦琮の礼讃によって作られ、日中は善導大師の自作であります。ことに印象ふかいは各章末ごとについている「無常偈」で末法思想をふまえてこの世のすべてのものは仮りの姿であって人間の醜くさ、命のはかなさ、時の流れの非情さなどを教え、私たちに早く真実の道理に目ざめ信仰生活に徹せよとくり返しよびかけられており、これを唱えるたびに内省しお念仏生活を精進せねばならぬとの思いを強くするのであります。

日没無常偈

今日も亦あたふたと雑事におわれてむなく過してしまった。風前のともし火のように今夜のうちに消えてしまふかもしれない命なのに、未だ六道をさまよって苦海をのがれる事も出来ないでいる。この事に早く気付いて健康な時から常住なるみ仏の境地を目ざしてひたすら精進しようではありませんか。

初夜無常偈

生理的に必要な睡眠も仏教の立場からいえば煩惱の一つであります。このうつし世の人生は煩惱はげしく迷いの連続で、救いの船はなかなかおとづれません。怠惰に安眠をむさぼるのをいましめ、心に西方浄土を目的地と思ひ定めてきびしく精進努力致しましょう。

中夜無常偈

不浄觀に徹してみれば人間の体は骸骨に五臓六腑をからませ、肉と皮でおおっただけの仮りの存在にすぎません。いかに美しく粧った人でも一旦呼吸がとまれ

ば臭屍とかわり果てます。そんな事にも気づかないで愛慾におぼれている人よ、今にも死がしのびよって来ていますぞ。というように危機感が警告されております。

後夜無常偈

時の流れはまことに早くうとうとしていれば忽ち朝がめぐって来ます。人の一生は常に死と背中合わせだという無常感を体得し、真剣にはげみ、仏道を行ずる皆さん、もろともに究極の無礙智を悟ろうではありませんか。

晨朝無常偈

朝ごとに六念をとえ衣食について反省してみましよう。道宣律師の食作法（じきさくぽう）の中にも食事はお薬として頂くべきで命を保つための最低のものがあればよい、好ききらいを言わず飢渴をのぞくのみで十分なはずとあります。悟りの世界を求めるならこういうきびしい出家のあり方を学びましよう。六念とは無量壽國に往生する為の助業として仏法僧戒施天のそれぞれを念ず

る事で、大木惇夫訳「和訳六時礼讃」には次のよう
あります。

われ念う （おぼしめす） み仏こそは世を救う大悲の父と

われ念う （おぼしめす） み法こそは世を超えて

生き往く門と

われ念う （おぼしめす） み僧こそはもろもろの

福みのる田と

われ念う （おぼしめす） 戒こそは弥陀尊の菩提の門と

われ念う （おぼしめす） 施しこそは波羅蜜を修むる道と

われ念う （おぼしめす） 神々こそはみ法と世を護るよと

回願して生き往かん 無量寿の国

日中無常偈

色あざやかな花も手折って日中に放り出しておいて
は忽ちしおれてしまうように、人間も精進という根ッ
こを切りはなしては宗教的生命を失ったも同然であり
ます。諸行無常、諸法無我の真理に目ざめ瞬時をおし
んで共にはげみ、まことの世界に到達致しましょう。

このように日毎に六時の礼讃を行じ無常偈をとえ、
無常を再確認して常住を求める——いいかえれば厭離穢
土即欣求浄土の思いをかため深く懺悔するならば、その
人は即ち日毎六時に清浄となり日々心身が浄化されて行
くはずであります。日中礼讃のおわりにある「懺悔文」
をみますと、無限の過去から今日まで永い永い時間を通
して言葉や行為や人間のすべての生きざまの中において
犯してきたあらゆる罪過をならべあげ、誰が知らなくて
もみ仏こそ我が罪を知っていられる。三宝及び法界衆生
の前にすべてをあらわして懺悔し、今日以後捨邪帰正
し、菩提心をおこし慈悲の心となりますから善知識とな
ってお浄土に往生させて下さい。阿弥陀様に至心に帰依
致しますと真心を披歴していられます。

善導大師の一千三百年遠忌の本年、全国の諸寺には礼
讃の声がひびく事でしょう。その一言一句はすべて尊い
仏語であり、僧俗一体となって唱和し法悦に至るとき師
弟同朋もろともに、皆仏子として平等大悲の仏光の中に
救いとられて往くのだという信心が、いよいよ増強せら
れるであります。



日中友好のかけ橋

——善導大師の遠忌と鑑真和上像の里帰りによせて——

みや ばやし あき ひこ
宮 林 昭 彦

(大正大学教授)

老いを重ねても、みずからの使命遂行のためには、いかなる苦難を克服し精進してやまない気力がお姿全身にあふれている。

若葉して御目の雫ぬぐはばや

去る四月十三日、花ふぶきに送られて、鑑真和上像は千二百年ぶりに故郷の中国へ里帰りをされた。唐招提寺の開山堂から金堂へ安置され旅立ちの法会をうける乾漆の大和上像（国宝）は、テレビの画面を通して拝見しましても、枯れ果てたお姿ではなくにかしらみずみずしさを感じさせた。

この和上像には、盲いた御目から国境をこえた広い人類への慈愛があふれているが、同時に盲目になっても、

これは有名な芭蕉の句であるが、前文に、「唐招提寺鑑真和尚来朝の時、船中七十余度の難をしのぎたまひ、御目のうち塩風吹入て、終に御目盲させたまふ尊像を拝して」とある。芭蕉が唐招提寺を訪れたのは、元禄元年、四十五歳のときであった。ちょうど若葉の頃であるが、

その柔らかな葉を一枚とって御目の雫を拭ってあげたいものだという意味である。芭蕉には、鑑真に対するご苦勞への感謝と深い帰依の心情がこもっていたことである。

この鑑真和上を中国の揚州大明寺に訪ねてわが国への招聘を請うたのは、日本の僧の栄叡と普照であった。和上は弟子たちにむかって、

「まことにこれ仏法興隆有縁の国なり。いまわが同法衆の中、だれかこの遠請に応じて日本国に向かい、法を伝うる者やある」

と問うたところ、だれも行こうと答える者はなかった。そこで和上は、

「これ法のためのことなり。なんぞ身命を惜しまん。諸人ゆかずんば、われ即ちゆかんのみ」

と日本へ渡航する決意をされたのである。

この『東征伝』によると、鑑真和上がはるか遠く日本

へ渡る決心をされたのは、もちろん仏法のためだが、なにより、「縁」にうながされたことであろう。和上自身そのまゝ唐にとどまっていたても、仏法のために充分に尽くすことはできたわけである。しかしはるばると危険をおかして日本へ渡ろうと決めたのは、日本が「仏法興隆有縁の国」であることをつよく認めたからである。袖触れ合うも他生の縁といわれるように、この世のなかは縁だらけである。かぞえきれない縁のなかには、おのずから強弱の差はあることだろう。ふとした触れ合いだけの縁と、親子や夫婦となるような縁とでは、大きな差があるにちがいない。鑑真和上が唐にとどまるよりも、日本へ行くことをえらんだのは、その縁の強烈さにうたれたからである。



ちやうど鑑真和上像が里帰りをした同じ頃、浄土門の高祖と仰がれる善導大師の尊像が、靈跡の終南山香積寺へ向って旅立たれた。

善導大師は西暦六一三年（隋の大業九年）に生れられた

が、鑑真和上は六八八年（唐の垂拱四年）であるから、善導大師が亡くなられた六八一年（唐の永隆二年）より七年のうちに誕生されているわけである。

ところでわたしたち日本人が、善導大師と出会えたのは、法然上人によってである。

「静かにおもんみれば、善導の観經の疏は、これ西方の指南、行者の目足なり。しかればすなわち西方の行人かならずすべからく珍敬すべし。なかんづく毎夜夢中に僧ありて玄義を指授す。僧はおそらくこれ弥陀の応現ならん。この疏はこれ弥陀の伝説なりと。……善導はこれ弥陀の化身なりと」

法然上人は『選択集』にかように述べられているが、この当時、学べども学べども教えに満足することができず、いずれの名僧や学者も真の師と仰ぐことはできなかったのである。ただひたすら人間の根元の苦悩に打ちひしがれ、

「なげきなき経蔵に入り、かなしみかなしみ聖教を

ひもどく」

といった求道の悩みが続き、やがていくたびか大藏經を読みかえしているうちに、上人の眼光が紙背に徹して、善導大師の教えにめぐり合い、「偏えに善導一師に依る」という、絶対帰依の心情が湧いてきたのである。

思えば、人との出会いは、長い年月を重ねても縁が結ばれなかったり、ふとした縁が深いきずなとなり、しかも真実の深まりが増していく場合もある。縁は異なもの味なものといわれるが、縁とは、まことに不思議なものである。



一昨年、わたしが中国を訪れたとき、中国仏教協会々長の趙樸初先生は、こんなお話しをしてくださった。

「中日両国の文化のつながりのように、深い根をおろした長い歴史をもつ例は、人類の歴史にも、まれではないでしょう。両国人民は、それぞれの祖先のなか

の傑出した人々の努力によって、物心両面で血肉の因縁を結んできたのです。われわれ両国の文化が血縁關係を結んだその歴史の歩みのなかで、八世紀の鑑真和尚は、その文化への献身の悲願と困難を克服する精神力によって、永遠にかがやかしい光をはなっています。

中日両国人民の往来は、西暦紀元前にまでさかのぼることができますが、聖徳太子のはじめた遣隋使の制度、長屋王子の寄せた「風月同天 共結来縁」のことばは、いずれもその時代の要求の具体的なあらわれであります」

そして、先きに述べた鑑真和尚の「仏法のため、どうして生命を惜しもう。みなが行かなければ、わしがひとりで行く」という言葉をくりかえし語られ、「千年ののちの今なお、和上その人の現身の声をきく思いがいたします」と眼差しに熱きものを感じさせながらしみじみと仰言った。

さらにつけ加えて、趙樸初先生は、

「中日の友好が現在ほど盛んでない終戦後の混乱期にひっそりと日本を訪ねたとき、椎尾弁臣大僧正（増上寺元法主）にお目にかかり、わたしは、鑑真和尚の現身の声を聞き、盲いたお姿に接し感涙しました。

そのとき大僧正は、「鑑真和尚は日本に渡られて実際に戒律を伝授されて仏法興隆をなされた。一方、日本には渡来されなかったが、唐の善導大師が中国で種下ろしをした念仏が、日本において法然上人によって、立派に実を結んで、念仏による世界人類の救いの大道が示されている。日中友好のかけ橋は大丈夫」といわれました」

といいながら、両手を差しのべて固く握りしめてくださったぬくもりが、いまだに強烈に残っている。



衆生仏を憶念すれば仏また衆生を憶念したもう（親縁）

衆生仏を見んと願すれば仏すなわち念に応じて現に

て目の前にまします（近縁）

衆生称念すればすなわち多劫の罪を除く（増上縁）

この善導大師のおことばは、念仏する人は、如来の光明によって縁が育まれ、培われることを示されたものである。

法然上人の伝記『十六門記』に、

「歡喜の余りに聞く人なかりしかれども、予がごときの下機の行法は、阿弥陀仏の法藏因位の昔、かねて定め置かるるをやと、高唱を唱えて、感悦隨にとおり、落涙千行なりき」

と述べられているが、上人が善導大師の示された念仏の真髓にふれ、しかも夢定中、まのあたりに半金色の聖者であられた善導大師のお姿を拝まれたときのみ心を偲ばずにはおられない。

まことに、善導大師こそ、日本仏教のあらたな蘇生のために、絶大な力をあたえ、日本民族の精神活動に多大な影響をおよぼした方である。

ちようどいま、新緑につつまれた中国では、二つの大法要が、日中両国の代表の方々によって厳かに行われている。鑑真和上は、故郷の中国へ里帰りの旅をされてどんな感慨をこめられているだろうか。

善導大師も一千三百年ののちの「今」も生きつづけて日中友好のかけ橋となつて、平和への光明をにかけておられる。

像法久しく荒れたり　香積寺

祖師の塔殿　重ねて新たなるを喜ぶ

両邦の兄弟　生願多し

万里花を看て　勝因を結ばん

これは趙樸初先生が、わが国の浄土門徒に寄せられた詩である。あの温和で熱烈な仏教信者の先生は、今かたときも心を離れたことのない善導大師と鑑真和上の法会を迎えられて、より強い日中友好のきずなを感じとおられるにちがいない。

法 話



仏に遭えるとき

よしだ 吉田 嘉雄
お

(東京・中目黒蟠竜寺住職)

「臨終はどんな風でしたか。」私はこの頃お檀家で不幸があると必ず家族の人達にこうおたづねしている。

寺の住職であれば一番気にかかることである。念仏する者は、必ず臨終に阿弥陀如来の来迎を得て正念往生ができる。寺の本堂に安置されている木像の本尊様は、仮の如来様であるが、臨終のときには必ず阿弥陀如来の真仏にお逢いすることができて、西方浄土へ往生することができ……。

いつも、こんな風に説いている私としますと「無事に逝くことができたかな」と思います。お通夜に行つて弔問客と遺族との挨拶を聞いております時、「お蔭様で楽に往生させて頂きました」「眠るように逝きました」と

遺族が涙のうちに挨拶しているのをみて、ひそかに安心をいたします。

私の母は八十四歳で病院で逝きました。信仰の篤い伊勢の寺で生まれ育ち、ハワイ開教使として十数年を父に従つて活動し、日本に帰つてからも布教のため留守の多い父を助けて四十余年間寺を守つてきた生涯であつたわけです。子供も八人育てた母でした。

さて、この母の臨終はどんな風であつたかは子供たちに取つては重要なことでした。

おそらく一日として欠かしたことのない母の朝の勤行念仏でした。その母の臨終こそは私たちの目標となるにちがいないと日頃から思つておりました。

母危篤の知らせを受けて私共は病院の母の枕辺に集まりました。主治医から臨終の近いことを告げられたとき母は「有難とう、有難とう……」とかすかな声で繰り返しているだけでした。寺庭に育った私共は低い声で、涙のうちに念仏を唱えるばかりでした。

心臓の丈夫だった母の臨終は時間的には永いものでした。主治医は声がかすれると、医者としてのつとめなのでしょいか、人工呼吸をしますと、「有難とう、有難とう」の声が又もどって来るのでした。やがて最後が来まして眠るように逝きました。

念仏の声は母の臨終に際しては聞えませんでした。

父の場合は、母と主治医と私と妻との見守る中で、高い聲が聞えなくなったときが臨終でした。自分の書斎に「往生室」の表示を掲げていた。床の間には、かなり前に来迎図を掛け、氣に入った香炉が置かれていました。

主治医が「臨終です」というように私にうなづきましたので、仰向けに寝ている父の背中に手を入れました。時、暖かった父の膚から一瞬光が斜めに通りすぎるように横ぎって、冷たいものが通りすぎたように思いました。

この掌の一瞬が父の臨終でした。

仏教信者であった主治医の先生と共に来迎図に香を焚いてお念仏をいたしました。

父の臨終に際して、父からは言葉もなく、念仏の声も聞こえませんでした。

昨今二三の高齢の方から相談を受けました。長期の療養生活を送っておられる方からでした。

食事も良いし、周囲の人も皆親切にしてもらっている。眠れない日がつづくとお医者さんから適当な処置をしてもらっている。身体のだこが余り痛むと注射もしてもらっている。何の不足もありません。この調子でゆくとも臨終も楽に、ひょっとすると眠っている間に往生ができるかも知れない。ところで、自分は浄土宗徒として、臨終には一声でも如来様に声をかけて、ご来迎を頂いて往生をとげたいものである。一声の念仏なしに、知らぬうちに死んでしまうのが不安である。できることなら、阿弥陀如来の真のお姿を拝して死にたいものである。楽な臨終であってみればそれで良いではないか。ゼいたくを言うではないと叱られるかも知れないが、教えて頂きたい。こんな内容の問いかけでした。そこで私は

前知恩院浄土門主岸信宏大僧正が、勅修御伝（元祖法然上人のお伝記）の文を引かれてお説きになっていることをお伝えしておきました。

勅修御伝第十九「正如房に遣はされた文」^{（聖）}

「もとよりほとけの来迎は臨終正念のために候也。それを人の、みな臨終正念にて念仏申たるに、仏はむかへ給ふと心えて候は、仏の願を信ぜず、經の文を信ぜぬにて候也。称讃浄土経には慈悲をもてくわへたすけて、心をしてみだらしめ給はずと、とかれて候也。ただの時によくよく申をきたる念仏によりて、仏は来迎し給ふ時に、正念に住すとは申べきにて候也」

正如房とは、後白河法皇第三王女式子内親王のことで藤原定家に師事せられた歌道の達人で、百人一首に、

玉の緒よ 絶えなばたえねながらへば
忍ぶることのよわりもぞする

という歌で人に知られた方です。加茂の斎院にお勤めになり、のち出家せられました。

正治三年（一二〇一）一月二十五日の薨去とありますので、平家物語の舞台になった源平争乱のたいへんな時代に生涯を送られたわけです。法然上人のお教えをどのようにな、何時頃から受けるようになったか分りませんが、この御文は、正如房が病いのために臨終の近きをさとられ、今一度お目にかかって臨終に際して心得るべきことをお聞きしたい、とお願いになったものへのお返事であります。

法然上人はその特別時念仏の期間に当たっていたので、お逢いにならず、臨終の用心についていろいろと記されたのであります。

その中に仏の来迎と私どもの臨終正念との関係についてのべられた文章がこのご文であります。

法然上人以前の先徳の来迎についての考え方は、往生人が正念に住した時に仏の来迎がある（臨終正念・来迎往生）というものでありました。法然上人が正如房にお説きになったのは、念仏者の臨終には必ず如来の来迎があり、念仏者は正念に住することができる（臨終来迎・正念

往生」ということです。

臨終にあたり、念仏ができたから仏の来迎があるのではなく、如来は念仏者の臨終には必ず来迎せられ、そして、如来の大慈悲心によるおまもりの中に往生ができる、と説かれたのであります。「ただの時によくよく申をきたる念仏によりて、仏は来迎し給ふ」とあります。「ただの時」すなわち平常の念仏の功德によって、如来の来迎はあるのです。

法然上人は「往生は一定とおもへば一定、不定と思へば不定なり」とお教え下さっておられるのです。往生は、念仏する者は必ず往生ができると、平常に念仏していれば、必ず如来の来迎を得て往生ができるとのことです。

暗はれて　のちの光と　思ふなよ

光に晴るる　暗夜なりけり

断つことのできない煩惱もあります。暗夜のような人の生活もあります。罪業の深いわが身を思うこともありましよう。

ある時は、心から滅罪を願いたいような気持をもつこともあります。凡夫である自分に、い、そもつくることもあります。しかし、人の暗の部分に気を取られてのみではいけないことです。如来の光を求めてゆくことが大切であります。如来のみ光りをわが身に浴びることさえできれば暗ははれるのです。

「源空が目には、三心も五念も四修も皆南無阿弥陀仏と見ゆるなり」とお仰せくださっております。

私の父も母も平常の念仏者でした。臨終をむかえて何の言葉も残さず、唯安らかに眠ってゆきました。正如房式子内親王も法然上人の文をご覧になり、如来の来迎を信じ、間もなく奇しくも正月二十五日正念往生をなされたと伝えられます。

臨終には「光明遍照　十方世界　念仏衆生　撰取不捨」の観無量寿經の文を特に唱えたと聞きます。私どもは、臨終のことを思い、そして私どもの周辺で臨終の人々に遭う時には、いつでも平常に念仏を唱え、如来の本願を信じ、如来の大慈悲により必ず往生が叶い、如来の来迎を得ることができると心におさめて、只一向に念仏することが大切であります。

特 別 寄 稿

法然上人『勅修御伝』の英訳について (二)



石^い井^い 真^{しん} 峯^{ぼう}

(大本山光明寺法主)

六

本誌の前号で私は日本仏教、特に浄土宗のアメリカ本土進出のことに触れ、ハワイ生れの日系三世、四世の力を借りねばならぬことに触れたが、これもなかなか容易なことではない。国内でも適格者の養成に尽力すべきである。宗立大学の責任も非常に重くなる。私はそれらの大学で使用する教科書として、『英訳勅修御伝』の適当な一部を教科書用に印刷して使用することを提案した

い。すでにそういうことができていれば結構である。日本の国内で仏教が、葬式仏教、法事仏教といわれ、衆生済度の役目を果していないのに、アメリカ人に対する海外布教など無駄であり、先ず国内仏教に活を入れることが必要だという意見もあるかと思う。それをもっともな意見であるが、海外布教によって本国仏教にも活が入れられるとも考えられる。

七

日本の寺院へは日本の若い者はよりつかない。アメリカ人経営のキリスト教会へは若い者が集まるではないか、寺は何をしているのかという批評、非難もある。但し若い者が求めるのはキリスト教ではなくて、英語であるようだ。教会のアメリカ人を利用して英語会話を無料で覚えようとする者が多く、極めて少数のものがクリスマスチャンになるように思われる。

フランス人経営の幼稚園のことを前回書いたが、園児は全部日本のこどもである。その中には寺のこどももある。日本人経営の幼稚園よりもしつけのよさが高く評価されるのであるようだ。そこをでて来て、キリスト教的になるかというとはそうではないようである。

八

私が昨年六月ハワイへ行ったことはすでに書いたが、その折ハワイ大学宗教学教授アルフレッド・ブルーム先生にお会いした。帰国したら英文仏教雑誌『ヤング・イースト』の夏期号が配達されていた。最初の論文がブルーム教授の「浄土教の革命的性格」であった。主として

親鸞上人に関する論文であるが、しばしば法然上人のお名前も出てくる。その一部を紹介させて頂く。先生曰く——「仏教的団体が密接な関係で集まっている所として、仏教及びハワイが、その創造性を刺激する大きな役目を果し、且つアメリカ社会と、すべての人々のために新しい方向に進めてゆくため大きな役目を果すものであると確信している。……最近長崎大学の正木教授が、ハワイ大学を訪問して、ハワイにおける仏教は中国に於ける仏教の変化、及びその後日本に於て新しい文化と新しい社会に適応した変化に比較して何等根本的改革を経験していない。……ハワイに於ける仏教伝道は、中国及び日本に於けるように、前もって仏教を知らない、新しい人々のところへ来たのではない。むしろハワイの仏教伝道師は日本人が伝統的信仰を保持する助けとなるために、来たのである。日本伝道師たちはすでに家の宗教として、ある特別な宗派と関係ある人々を助ける役目をしたのである。その結果ハワイ仏教はもともと伝統的日本の文化と社会の延長なのである。」

ブルーム教授は親鸞上人と同時に、法然上人をも高く評価し「一枚起請文」の全訳を書いておられる。参考に

なる論文である。

九

この小論を書いている間に配達された「中外日報」一月二十二日号に、京都大学名誉教授医学博士川畑愛義先生の「アメリカ仏教界の将来へ」が掲載され、その中に山本玄峰老師に関することが書いてある。すでにお読みになった方も多いと思うが、読んでいない方のために紹介する。——かつて禅界の大長老、山本玄峰翁が長島のハンセン氏療養所に行き、禅の講話を頼まれた時、禪師は身体の不自由な患者をみて、つぎの如くやさしく説教されたという。

わしは坐禅するのが専門じゃが、このような場所では坐禅は出来ぬ。いつでも、どこでも、誰でもできるのが念仏じゃ。仏教の話はいくら聞いても実行しなければ何の役にも立たぬ。わしがこれから念仏を唱えるから、あなた方もわしと一緒に唱えなさい。まず姿勢を正しくして、両手を合わせなさい。わしがナムアミダブツと唱えるから、あなた方も私のあとをつけてとなえなさい、

と。初めはきまり悪そうにしていた患者たちも、いつしか老師の氣力に引かれて真剣に「ナムアミダブツ」、「ナムアミダブツ」ととなえていたという。

これについて、全生庵住職の平井玄恭師はつぎの如く解説している。

老師のこの慈悲心はどこから生れて来たのであろう。それは坐禅の力によって、一度徹底して自己を捨て切り、ふたたび坐禅の力によって一事、一物、一切が自分自身として開眼し、すべてを超える老師の禪定力であると思う、と。

私は、久しい前のことであるが、あるところで老師のお話をうかがっているので、前記のことはあり得ることだと思った。当時老師は三島市の曹洞宗竜沢寺に止住されていたと記憶する。ここまで書いて、老師について思い出したことは、その会場で老師の態度であった。正面に、仏さまの掛軸があったかどうか覚えがないが、老師が導師をつとめられ、うしろに聴講者が何十人か坐っていたが、老師はおつとめ中、うしろを向いたり、横を向いたり、まことに、何と申していいか言葉に窮するのであるが、とても常人の導師には出来ないことを、自由

自在になさったところを見て、老師が普通の人ではない、すぐれた、大きな人であることを証するものだと感心した。

十

『浄土』誌の一九七九年十二月号に上智大学教授のポール・リーチ先生が「浄土宗とカトリックを比較して」という立派な論文を発表されていて、その中に「……浄土宗に関して採しえた外国語の著作は次の数点でしかなかった。さらに法然上人に関するものはただ一冊であった。しかし、この約半世紀前の一九二五年に浄土開宗七五〇年記念として知恩院によって出版された本は、見事な豪華本であり知的にもすぐれた著作である。題は「ホーネン・ヒズ・ライフ・アンド・ティーチング」(石井曰く、この題名は英文であるが、前記の理由から仮名がきにした)となっており、著者は青山学院教授で聖書解説学者のコーツ氏と芝中学教諭の石塚竜彦(石井曰く、竜彦が正しい)となっている。翻訳も非常によい仕事がなされ、何より適切な注がつけられている」とある。

リーチ先生がコーツ、石塚両先生の『勸修御伝』の英訳本を高く評価されていることはまことに喜ばしいことである。この訳本は一種の仏教辞典であると私は思っている。仏教学者でない私などには大変ためになる注が非常に多い。

ここで紹介することは少し恥かしい気もするのだが、手元にないのでよくわからないが、私は二、三十年前に教学週報社というところから、和英両文の法然上人伝を出版している。先頃何年ぶりかで、その本を書架から取り出して英文を読んで見たが一応法然上人のご生涯がわかる。よく覚えていないが、四十八頁くらいの小さいもので、後半に和文がついている。出版当時、私の友人が一、二の学校で英文教科書として使用してくれたと報告を受けたように記憶している。この小さな本は恐らくこの仏教関係の図書館にもないだろう。

私事にわたって恐縮であるが、私は昔、大正大学で非常勤講師として英語を担当したことがある。その折、各宗のすぐれた青年学者の力を借りて東西の仏教系大学生の英語弁論大会を開催した。いつも京都女子大学の学生が上位を占めるので、不思議に思い、同大学を訪問した

のであるが、大学には外人の先生もおられて、テープなどを使用して発音その他の指導をしていることを知って成程と思った。昭和四十七年、光明寺で二日間前記仏教青年学者の主催で英語仏教講座を開催し、多数の外人が参加した。これは翌年から各地で開催されたが、一時中絶し、最近再開されたと聞いて喜んでゐる。以上いろいろなことを書いたが、少しでも参考になれば幸いである。

(了)

|| 新刊 ||

安居香山 著

『煎茶道』

新書判 一五八頁 価八八〇円

○近年めざましい発展をみる煎茶道に関する必携の好案内書。

(申し込み先)

〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―一六

法然上人鑽仰会

村瀬 秀雄 著

|| 新刊 ||

『和訳 六時礼讃』

善導
大師

B 6判 二六五頁 価二四〇〇円

|| 好評 ||

『和訳 観經四帖疏』

善導
大師

B 6判 五八四頁 価三五〇〇円

『和訳 上人選 択集』

法然
上人

B 6判 三八七頁 価二五〇〇円

『和訳 浄土三部經』

B 6判 四七四頁 価二五〇〇円

取扱い 法然上人鑽仰会



伊豆高原の春

— 季 寄 せ —

木の した りゅう いち
下 隆 一
(随筆家)

使った粗末な物で印刷も鮮明とは言えなかった。表紙も弱く、裏打ちをして使っていた。それでも吟行などでポケットに入れて持ち歩くことが多かったので痛みがはやく、サックを作って大事にしたものだった。そのサックも二三次作り代えたように記憶している。

私の高校時代は勉強をしないで、運動とそんなこととうつつを抜かしていたのである。

○
なぜか、私は『季寄せ』という言葉が好きである。俳句に親しみはじめた時手にしたのが、高浜虚子編の『季寄せ』であったからかも知れない。現物は引越しの際どこかに紛れ込んでしまって、いま手許にないのが残念だが、戦後すぐの出版物だったので、仙花紙を

全くぬるま湯に浸かっているような毎日だった。それだけにいまの高校生のように受験受験としばられることもなく、人間味豊かな生活を送っていたように思う。そのせいかどうかは判らないが、現在に比べると稚拙ではあるが素直な句を作っていた。古い句帖を開くと懐しい句が並んでいて、次々と思いが甦って来る。

まひまひのまひ疲れしや流さるる

沓脱に蜥蜴の捨てし尾が動く

麦稈帽積み上げられて傾ける

夕立して坂多き町暮れにけり

北斗星一つは山にかくれ澄む

三角が解けずて眠し雨夜長

行春に手を振って別れたく思ふ

句帖を見るまでもなく、こんな句がすぐ思いつく。高校二年から卒業頃までの作である。

私にとって『季寄せ』は、後に文芸春秋から出た山本健吉編の『最新俳句歳時記』（全五巻）を求めるまでは、句作のための貴重な参考書であった。『歳時記』を『広辞苑』とするならば、『季寄せ』はコンパクトな『明解国語辞典』といったところであろうか。私は国の内外を問わず、旅行の際は必ずその季節の『歳時記』と『明解国語辞典』を携えて行くことにしている。これさえあれば、どんな長旅をしても退屈することはない。無味乾燥な長時間の飛行機の中でも、『歳時記』を見て句を案じていれば、自分だけの世界に遊べるからである。句作に倦めば辞書を行き当りばったり聞いて、一語一語拾い読みして行く。なかにはその語がヒントになって句が出来ることも往々にしてあり、更に平家物語、太平記、太閤記、三国志、水滸伝等に思いを馳せれば、浪漫の世界は限りなく拡がって行くのである。

話を『季寄せ』に戻そう。

昨秋十月、朝日新聞から『季寄せ—草木花』（全七巻）が刊行され始めた。秋（上下）、冬、春（上下）、夏（上下）の順で発刊され、現在私の手許には夏上まで六巻が揃っている。この原稿を書き終える頃には最後の一卷も届くことであろう。題名の通り、季節の草木花の写真に例句をつけ、植物学的解説を施したもので、例句は私の好みでないものも散見されるが、カラー写真は美しく撮られている。

この本を私は新聞広告で知った。刊行前であった。『季寄せ』という文字がパツと目にはいったのと、写真富成忠夫という名前に引かれたのである。富成さんを知ったのは、山と溪谷社から出ている『野草ハンドブック』

1 春の花』という本であった。この本を買った切掛は、伊豆で暮らすようになって、あまりにも私が植物について無知であることに気づいたからである。私の知識など些細なもので、自然界には種々雑多な草木があることをつくづく思い知らされたのである。雑草雑

木と一括して片づけるのは簡単だが、これらの名を確かめることは句作の上でも必要なことだと思い、先ず手始めに植物図鑑を買ったが、これはあまりに専門的すぎて殆ど参考にならなかった。写真で、それもカラー写真で実物と見比べなければなかなか覚えられないのではない。その他の目的としては、食べられる草木を知ることがあった。大体私が伊豆に居を定めたのは、氣候が温暖であるということ、海に近いことという条件に叶っていたからである。寒冷地よりは温暖地の方がなにかにつけて便利である。衣服も少なくて済むし、冬になっても野菜が採取出来る。海が近いと、もし戦時中のように統制されても塩は自給自足出来るし、海は魚介類海藻類を供給してくれるからである。どうも私の考えの根底には、戦時中の食糧難の体験が陰を落としているようである。

日頃家族に、どんなに食糧難の時代が来ても俺は絶対生きびると豪語している手前、食

べられる野草や山菜の名前と実物ぐらい知っておかなければ話にならない。

「そんな時が来るかしら？」

と、アメリカの大学を休学して一時帰国している娘。

「来ないにこしたことはないが、なにかの都合で食糧の輸入が止まったとしてみるよ。日本は忽ちお手上げだ。それに旱魃、冷害、風水害、虫害、地震、火山噴火と自然はいつ気まぐれを起さないとも限らないからね」

いくら私が危機難を煽っても、繁栄の時代に成長した娘にはピンと来ないらしい。

「もし、そうになったらどうするの？」

「先ず庭を全部畠にしてしまう。足りない分は野草で補う。そうすればお母さんと二人、なんとか食いつなげるさ」

「私はどうなります？」

「お前はさっさとアメリカへ戻ればいい」

私が危惧するような事態は百年経っても来ないかも知れないが、地震や噴火は明日にも

起るかも知れないのである。事実、昨年十月二十八日の朝、なんの前触れもなしに木曾の御岳山が噴煙をあげ、多大の被害をもたらしたのであるから……。



雑木林の生態については、足田輝一著の『雑木林の四季』『雑木林の博物誌』で、いろいろと教わった。足田さんは武蔵野の雑木林の研究者であるが、武蔵野も伊豆も雑木林に大差のあろうはずはなく、エゴノキの花、クサギの花、エビネ、キンラン、ギンラン、モミジガサ、ヤブレガサ等の知識はこれらの本から得た。

伊豆の雑木林の春は、ヤブシが黄緑の花房を枝という枝から環珞のように垂れさがらせるのに始る。花の一つ一つは取り立てていう程のものではないが、これが集って花房をなすと、えも言われぬ美しさを生じる。環珞といえ、私はすぐアジヤンタの石窟院の壁面

に描かれていた持蓮華菩薩をはじめとする美女群像の宝飾(環珞)を思い浮かべる。案外この環珞のヒントはキブシの花房ではなかっただろうか。ただしインドにキブシがあるかどうかは私は知らない。不思議なことに、この最も春らしい花をどの『歳時記』も取り上げていない。『季寄せ—草木花』などには恰好の被写体だと思ふのだが。従ってキブシの花を詠んだ句に出会ったことがない。私も何度か試みたが、詠みにくいことは確かである。

春なれやキブシ環珞懸け初めぬ

百幾の環珞を下げキブシ咲く

環珞やキブシ花房風に揺れ

やっと三句を得たが、もとより満足出来る代物ではなく、目下思案投首といったところである。

三寒四温を繰り返して春になるというが、今年は春の訪れが大幅遅れた。日記代りの句帖を見ると、立春の頃に木の芽立ちの句があるかと思うと、春寒、余寒、春霜、料峭の句の間に、暖か、うらら、風光る、踏青などの句が小さくなっている。しかし四月になって暖かい日が続いたので、約半月遅れの桜も一斉に花を開き始めた。

天城晴れ乏しき花の昼蘭けぬ

花見んとこの坂登りつめしまで

先に食べられる野草について触れたが、十数種その存在を確認しただけで、路の藎以外はまだ試食していない。野草を食べて季節感を味わう程度ならいいが、食糧の足しにしなければならぬような時代の来ないことを願っている。ただ今年こそタラの芽を取って来て天婦羅にしようと思っている。私だけが知っているタラの木の大群落があるのである。

浄土句集

一田牛畝選

玄関に薺籠ある茶会かな

東京 田中 秀代

童心に返り一夜さ手毬唄

東京 猪瀬 幸子

経蔵を廻しつ聞きし除夜の鐘

東京 大野いく子

ぐらぐらと湯豆腐鍋に酒うまし

東京 星野 小登

福鳩のつきし破魔矢の優しさよ

東京 小笠原香祥

東の間を寄り会ふホーム日向ぼこ

東京 阪入志津枝

恋猫の和尚の喝にもたじろがず

福岡 原 敬二郎

響き合ふ瀬のとうとうと春の宵

群馬 島津 か寿

一代記み堂にかかげ法然忌 大分 丹羽 難中

評 法然上人の御絵伝を本堂にかけ連らねて、御忌僧が桑の鞭で絵解きすれば、善男善女は感激の涙しつ伏し拜む。

水ぬきて供華する僧や堂凍てる 京都 安藤 寛

評 花瓶は銅や陶であるが、蛭峨の冬は寒く、水を入れて供華すれば、氷って破損したり、底が抜けたりで水を抜く、と。

ながらえて再び桃の大遠忌 三重 山田 うた

評 大遠忌は善導大師の千三百年であるか

ら、前の遠忌の五十年前に本山詣りをし、又長生のお蔭で今年の本山詣りとは感無量で、念仏のお蔭の永年長寿とならん。

東京 阪入 等達

評 善導大師の大遠忌は京都知恩院は三月に、東京増上寺は四月に、それまで命大事にして春の法要に相逢ふことを待つ。

喜寿の賀に薔薇の花東黄が似合ふ 愛知 渡辺 杜水

評 紅白黄とあるが、黄が一番目出度い色であり、喜寿の賀ともなれば尚更である。

福岡 永江 隆説
どろんこの靴の重たき雪解道

山形 松田 光普
除雪車の深夜の人夫黙しをり

東京 末常てる子
初句会帰路におろがむ西富士

福岡 高良 慈風
はからずも花立山に聞く初音

山形 松田 允子
在家より嫁きて今朝の雪を掻く

福岡 行正 一如子
松火たきの動けば動く和布刈かり弥宜

福岡 高良 幸代
菱餅のそり返へりたる雛の段

福岡 上滝津弥音
紅梅の紅極まりて黒く見ゆ

福岡 榎藤みきを
老夫臥し自覚なきまま日脚伸ぶ

東京 細田 初枝
利休忌の京の点心てふ名菓

福岡 服部 光代
露の墓つめば手籠にあふれけり

福岡 新森 耕春
水浴のための石段人の波

東京 栗原とも子
露の墓そのほろ苦き好と言ふ

埼玉 佐久間愛子
沈丁の匂ふ夜更けの門開く

福岡 行正 明弘
野の幸を豊かに盛りて月まつる

東京 栗原やえ子
初釜の菓子に濃みどり重ね松

長野 原 幽遊
春分に新発意産まれ堂灯り

福岡 国友 星畝
妻を師に月の野点の吾娘わがこ点前

東京 鈴木 葉子
とんとんと星を落して女客

東京 真野よし子
落葉掃く老の箒目ちぐさぐに

福岡 前田 秀峰
池掃除日課となりし柿落葉

東京 新井 新生
年寄りは年寄りの日々小春かな

東京 吉原登起子
初釜や茶室の障子風騒ぐ

一田 牛畝
寺々を抱き青葉の東山

表紙のことば

「鯉」

土屋 正男

近くに小公園があつて周りに日本風な趣きを残した池がある。いかにも年を経たような大きな鯉がいて、雨もよいの日など水面に跳ねてびっくりさせられることがある。

汀に立つと激んだ底からぬつと浮き出してくて、もぐもぐ口を動かしながら、人間の品定めでもするように一瞥して悠然とまた水底へ帰っていく。池の主といった貌だ。

旧殿様の持ち庭から、今区立の公園となつた池の中を世界として、鯉はめまぐるしい人

の世の変遷を眺めてきたことだろう。

鯉鯢として名を追い物に追われて朝夕を奔走している人間が大きいか、水に沈んで風雨をさけ、射し入る陽光を受けて水中に泛ぶ鯉が小さいか、夢応の鯉魚の僧のようにいちど鯉となつてみたいものである。

五月号はやっぱり鯉。鯉のぼりに象徴される動の姿は稚々しい男の節句に想応しく、泰然として悠揚迫らぬ静の姿は年長けた人の姿ともいえようか。

きすな
絆

【二】

—誰がこの子らをそうさせたか—

もり
森

くに
邦

お
夫

(町田市福祉懇談会座長
町田市ボランティアの会顧問)



風が冷たい横浜港の大桟橋に近い山下公園の遊歩道の片隅に、ブロンズ製の、膝をかかえてお座わりしている女の子のかわいい像があって、目の前の遊歩道を隔てて海のかなたを瞬きもせずに、じっと凝視^{みつ}めている。

遠いむかしを回想してるのかもしれない。なにか憂い顔で。瞳を凝らして海のかなたをみつめている。

「あッ!! 赤い靴の女の子だ!!」

七、八才の小学生らしい男の子と女の子が大きな声で元気に、そう云って、この女の子の像にかけ寄って両側

から抱きつくような恰好^{かっこう}で「赤い靴」の童謡を合唱した。

去年の十一月の十一日、この海岸公園の遊歩道のかたわらにお目見得して以来、この公園に遊びに来る子供たちの人気を、このお嬢さんが、一手に独占してしまっているのだそうだ。

野口雨情先生大正十年の作品と云うから、この「赤い靴」の女の子、既に六十年も前にこの横浜の波止場から異人さんに連れられて船に乗って行っちゃったことにな

っているのに、さすがに、高名な抒情詩人の豊かな詩情の灯は消えていなかったのだろう、この長い歳月の隔たりをこえて、今、また、横浜のよい子たちの前にかわいいその姿を再現して、仲よく、よい子たちの、お相手をしてくれているのだ。

海の色も、空の色もその頃と少しも変っちゃあいないが、この詩が生れた六十年前の横浜港と云えば、いつも大栈橋に二、三十台の人力車が道端に整然と並んでいて、お船からおりてくる異人さんの客を待っていたもので、とき折、すぐく達者な英語で異人さんと立ち話などしている年老いた車夫の姿など文明開化の錦絵にでもできそうな風景で、さすがに、欧化主義の風潮、はなやかだった横浜ならではの情景が、今でも忘れられないで臉のうらに残っている。

そして、その当時の横浜港の、そんな波止場の特異な雰囲気と感傷の中で、この「赤い靴」の詩も、「青い目の人形」(大正十年)も呱呱の声をあげたのである。

ともあれ、碑とか像とかが大好きな日本人が、大臣や博士のそれでなく、悲しい運命に泣く童謡の中の一少女を選んで像を造り、低俗なマンガや快獣テレビで情操の

泉も涸れつくしてしまっている今の子供たちの心に慈雨のような潤いと、ほのかな心のやすらぎを提供してくれている点で、この「赤い靴」の像の出来は、いつまでも大きな意義をもつことだろうし、七九年の国際児童年を記念しての素晴らしい置土産でもあり、地下の野口雨情先生のおよろこびも、ひとしおのことだろうとしみじみ思うしだいなのである。

× × ×

昨年の暮れ、東京のある老人ホームの忘年会に招待され出席したが、たまたま、この日の慰問の為に来館していた、その町の小学校の女生徒のコーラスで私たちも幼い頃さかんに歌った、あの懐しい「ふるさと」が合唱されたが、流れるように美しい歌声に、宴席のお年寄り達は遠い昔を思い泛べているのか陶然と聞き入っていたが、合唱が終るとお年寄り達から一齐に嵐のような大喝采が子供達へおくられると云う温かい一場面があった。

今は、それぞれの事情があって、このホームで毎日を通り過ぎておられるお年寄りの方たちにも、かつては幼き日々を送った遠い故郷の山や川が、いつまでも懐しい想い出の中に生きていることだろうと思うと、ひとしお切

ない感傷で胸が痛む思いだったのである。

へいかにいます ちちはは

つつがなしや とものがき

あめにかぜに つけても

おもいいずる ふるさと

へこころざしを はたして

いつのひにか かえらん

やまはあおき ふるさと

みずはきよき ふるさと

詠み人^よ不詳^{しよず}のまま歌いつがれて六十五年、切々たる字句に、ふるさとの父母を想う、ふるさとのとものがきを想う、ふるさとの山や川を想う断ちがたき強い郷愁の念が、人の世の「絆^{きずな}」となって、この詩（高野辰之作詩）のいたるところに息づいているのに気づく。

へいかにいます ちちはは

なんと云う温かい慈悲に満ちた言葉なのだろう。

へつつがなしや とものがき

なんと云う美しい友情の溢れている言葉なのだろう。

慈悲の心は、人々の心を豊かにし、愛の感情は、人々に調和の美しさと、やすらぎの温かさを与えてくれると云うのに、昨今の世情はどうだろう。親は子に対する慈愛の心を失ない、子は親を慕うことを知らない。親子の断絶を助長させるような冷たい弊害の多い家族生活が、なんの反省もなく毎日くりかえされている。

行き過ぎの安ッばい文明の弊害が家庭生活に深く食い込んで、だんだんと人間を横着^{おうちやく}にし、墮落させてゆく。

赤ちゃんが母親の無意識の間に産れて、産れた赤ちゃんにネームプレートがつけられて母親から引き離されて新生児室に移される。人生に於ける第一回目の核生活が始まるわけだが、このごろでは一事が万事で、すべてがこんな横着な仕組だから、やがてのことに、育児ノイロ^{育児ノイロ}にせなどと、甘ったれたことを云ってる母親が、幼気な^{幼気な}

幼児を哀れにも道づれにして尊い命を奪ってしまふ。ゆるせない。

行き過ぎの文明の弊害が人間をどこまで墮落させてゆくのか、恐ろしい。

こんな世の中だから、どこへ行っても、老人ホームは超満員で、冷たい家庭から逃避して温かい仲間を求めて年寄り達がここに集ってくるのだが、さて、今までの私の体験ではたとえば、ホームの設備がいかに完璧であろうとも、待遇がどんなに良からうと、仲間がどんなに親切だろうと、ここに住んでいる年寄りで、本当に心の底から明るい笑いのある人に残念ながらまだ出会っていない。

気の毒に、家庭と離れて住むことは佗しい、しかし、その淋しさよりも、余計者にされたみじめさ、やるせないさの気持ちの方が強くて、ここへ逃避する年寄りが多いことを、私たちは知っておかなければいけないのではないだろうか。

「ふるさと」の合唱が、こんなにもうけて涙をためて聞き入っていたのも、「ふるさと」が、「家」が、所詮はこの人達の「心」の拠点だし、心の「絆」でもあった

からで、いまは、それすらも失いかけている、いや、失ってしまったている。ここでの佗しい毎日が、楽しからう筈がないのである。

その日も、さかんに「こんないいところで余生をおくれて幸わせですね」とか「余生を楽しくお過ごし下さい」とか、どれもみんな慰めと激励の言葉ではあったが、私はどうもこの「余生」という言葉が好きでない。この言葉のひびきには、なにか、なげやりな、どうでもいいものを感じさせる。

年寄りだって、みんな明日があることを信じて生きているのだし、明日を待ちのぞむと云うことは、どんな意味にしても明日に希望をもつことなのだから、立派に「生命」の本番であって、「余りの生涯」でも、「余りの生命」でもない、人間の生命はたった一度死ぬまで本番なのである。

「余生」だなんて、きめ込むから老いぼれてしまふ。特に、このような施設で暮らしておられるお年寄りに対して用いてはならない言葉だと思って自戒している。

x

x

x

釈尊の十人の偉いお弟子さんのお一人で、この十人の

お弟子さんの中で、第一の智慧者と云われた舍利弗しやうりふくと云う高僧の教えに、

「貧欲びんよくの壊滅くわいめつ、瞋恚しんいの壊滅くわいめつ、愚痴ぐしの壊滅くわいめつ、これを称して涅槃ねはんと云う」

とある。

もと、婆羅門の家の出身だが、釈尊の弟子となり、苦難の行を悟りへの修行の道と精進した高名な哲人、素行あくまでも潔白と云われるこの方の有難い教義である。

私は、毎日朝の食事の前に、かならず、なにか、なんでもいい有難いお言葉を思い泛べて、頭の中で読誦するのが癖になっていて、その日一日の自戒の為に習慣のようになつて実行している。なにはなしに、それだけのことで朝の心がなごむのである。

今は世の中が非常に複雑で、しかも怪奇だから、家から一步外へ出ると非常の嵐が吹き荒れていて、無智と、無責任、利己主義と没常識の行為が平然と横行している世の中である。

対人関係に於ける相互信頼はついで、惨忍な非行のくりかえしは、人間不信と断絶をあまねくこの世にひろがらせている。

「百八煩惱」と云うが、それどころの騒ぎではない乱れに乱れて、云うなれば、暗黒の闇に閉ざされた末法まつぽうの姿そのまゝの娑婆だと云つても云い過ぎではないくらいな乱世である。

そんな世の中だから、この日常をすこしでもさわやかに、そして、人間らしく慎ましく生きてゆこうとする為には、凡夫の私たちは、いつもなにか、心の支えになるようなものが必要なのだが、私は、そんな心の支えにつねに金言とか名句とかを心の中で暗誦することを習慣づけていた。

たとえば、いつも私のそばにいて、私を叱咤激励してくれる「養高志」の軸などは、かつて東北の講演旅行で、北風の寒い仙台の街の場末のある滑董店で購めたものだが、以来春が来ても、夏が来ても季節に関係なく、なん年となく、私の室の床の間から消えることなく、弱い凡夫の私を、いつもさびしく教導してくれている。なんと云う有難いことか、「養高志」と云うことには、これでいいと云うときがないから、それこそ生涯を通じての修養なのである。

x

x

x

よく、「煩惱即菩提」と云うが、とくに昨今の世の中は、もろもろの煩惱が私たちの日常生活をとりまいて悩乱し、はげしく菩提(さとり)のさまたげをしている。

「百八煩惱」と云うくらいだから、この娑婆での、その壊滅はなかなかだろうが、世の中が進むにつれて、百八が、千八になり、万八にでもなったら大変である。

しかし、私たちが住んでいるこの世の中すべての現象には必ず表があつて裏があり、まったく異質の煩惱と菩提が常にこの世では同居しているのである。

苦楽があり、愛憎があり、善の良さと惡のにがさが隣り合せている。

だから惡のにがさを知ることによって、善の良さを知り、憎しみをこえて、より豊かな愛を理解することができたとするれば、これが「即菩提」と云うことで、所詮は離脱できない煩惱の娑婆に住んでいるのだから、煩惱をふまえて煩惱を超えることを考えれば、そこに、おのずから菩提(さとり)の世界があると云うことではなからうか。

「菩提の心」——それは愛の尊さを知る心だろうと思う。

(未完)

◇表紙版画絵販売のご案内◇

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、土屋正男先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観にも溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ、振替にてご注文願えれば幸いです。

なお、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。振ってのご注文をお待ちします。

(申し込み先)

〒102 東京都千代田区飯田橋一—二—六

法然上人鑽仰会

振替(東京) 八—八二—八七



念佛ひじり三国志

(主)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

んな文章がある。

一

関東から帰洛した親鸞が安居院へおもむき、聖覚法印の「唯信鈔」を精読し、自ら書写したことは、すでに紹介した。これに語り足せば、最初の書写が寛喜二年（一二三〇）の五月であって、現存する分だけでも最後は建長六年（一二五四）の恵空写伝本奥書にまで及んでいる。

現存する分とは、奥書などで当時の書写と確認できたものだけを指す。散逸した分を加えたらおびただしい数にのぼるであろう。親鸞はせっせと書写しては門弟や信者に配っていたらしい。関東の門弟に書いた手紙にもこ

——さきに下しまいらせ候ひし「唯信鈔」「自力他力」などの文にて御覧候べし。それこそ、この世にとりては良き人々にておはします

〔未燈鈔〕

「唯信鈔」と並記した「自力他力(事)」は隆寛律師の文で、聖覚や隆寛は見事な念仏指導者なのだ、と親鸞は強調することをはばからない。

また、例のわが子善鸞(慈信房)を義絶した通告書簡の

＜書写をする親鸞＞



前号のあらすじ

盲目の法師生仏が、法然上人の人となりから感ずるものは何であつたか。その人生の苦勞から譲成された、あの天空快々なる、明かるい性格だけだつたか。そうではあるまい。穏やかにして、静かなる老成した師の上人には、念仏信仰への溢れるばかりの熱い決意が秘められていたにちがいない。

浄土二祖、聖光房弁長に托された唐の善導大師への夢は、法然浄土教の信仰姿勢の基盤であつたわけである。その弁長のもとへ、後代二祖三代と仰がれる三祖の良忠上人を使わしめたのは、一説によれば、法師生仏の熱意によつたものであるとも伝えられている。嘉祿二年（一二三六）、石見国三隅郡の多陀寺に隠棲する良忠上人を生仏が訪れたのは、法然上人が往生されてから、およそ四分の一世紀ほど後のことであつたという。

中でも、「唯信鈔」などをしっかり読んで善鸞の邪義に迷いこんではならぬ、と門弟の性信房をいましめている。（「血脈文集」）

この書簡は康元元年（一二五六）親鸞八十四歳の日付だ。親鸞自身も「唯信鈔文意」なる注書をものしているほどで、聖覚の「唯信鈔」は親鸞にとって重要な「念仏聖典」の一つだったことがわかるであろう。

内容では「唯信鈔」のこんな文章が親鸞に共感、憑依

を深くしたのではあるまいか。

——仏力無窮ナリ。罪障深重ノミヲオモシトセズ。

仏智無辺ナリ。散乱放逸ノモノヲ捨ツルコトナシ。

信心を要トス。ソノホカヲバ願ザルナリ

“行”よりも“信”こそが念仏者にとっては肝要だ、と聖覚は強調しているのだ。

この点を「親鸞伝絵」は次のような逸話で唱導する。

ある日、法然の面前で門弟たちが念仏者の在り方について論じ合った。信仰が優先するのか、修行実践が正しいのであるか。その日は結論が出なかった。翌日再び集ったとき、親鸞は提案した。

「今日ハ信不退、行不退ノ御座ヲ両方ニ分タルベキナリ。イズレノ座ニ著キ給フベシトモ各々示シ給エ」

お互いの主張を、左右の両座に別れて坐することで表明せよ、と提案したのである。

このとき聖覚法印と信空上人はすぐに信仰が優先する“信不退”の座に坐った。親鸞も坐ったが、遅参した沙弥法力（熊谷直真）も事情を訊くと、「然ラバ法力洩ルベ

カラズ。信不退ノ座に参ルベシ」と即座にえらんだ。法然上人も「源空モ信不退ノ座ヲツラナリ侍ルベシ」とおっしゃった、という。

三百余人もいた門弟たち「或イハ屈敬ノ意ヲアラハシ、或イハ鬱悔ノ色ヲフクメリ」と迷ったままであった。

現実にそんな争論があったかどうか。

法然の在世時、一念義と多念義のひじりたちは同席することを選び拒否した、と言われる。そんな対立ムードを背景に「親鸞伝絵」の作者は、親鸞こそは法然義の直系だ、と主張したかったのであろう。

その直系路線の駅通に聖覚法師の像が大きく浮び出ている事実も興味深い。

ただし、聖覚側からの親鸞へのアプローチは殆んどなかったようである。

いま紹介した“信行両座”に似た逸話を聖覚は「十六門記」でも書く。その第十「勸進念仏往生門」である。

その門弟が聖覚法師とただ二人で法然の説法を聴聞していた。終ったとき門弟は質問した。念仏を唱えているとき妄念が湧いて心が散乱したらどうしたらよろしい

か。法然は答えた。「妄念余念ヲモカエリミズ散乱不淨ヲモ言ワズ、唯口ニ名号ヲ唱エヨ。モシ能ク称名スレバ仏名ノ徳トシテ妄念自ラ止マリ、散乱自ラ静カナリ……云々」と。

このあと聖覚が問いをかさねる。善導和尚の文によると、虚仮心の行人は、勇猛に動行したとしても往生は不可だ、と言っている。これはどういうことでしょうか。

同席の門弟も「私もそこが訊きたかったのです」と同調した。

法然は答えて、善導和尚の文は三心を軽んずる増長慢を嫌ったのであって、方便として往生は不可と説いたものだ。信仰の本質に変わりはない、と。

聖覚とその弟子は「信仰ノ余ニ申シ演ノ詞モナク唯一同ニ阿ト言イキ」と感動にむせんだという。文の中途にあった願生の心少にても南無阿弥陀仏、妄念の起る時も南無阿弥陀仏、三心具するも南無……を体得したのであった。

聖覚法印とただ二人で、法然から「信不退」の説教を受けた「その弟子」とは、親鸞ではない。聖光房弁長だったのである。

後年、浄土宗（鎮西派）と浄土真宗とに分裂対立していった流れを思うとき、聖覚法印と固く握手した盟友同志が弁長だったか、親鸞か、俄かには判別できない。いや、お互いに譲り合わぬであらう。そして妥協がつかぬままにお互いが聖覚の地位を「説教念仏義」とか「説法義」などと傍流視する。

鎮西上人弁長にしろ、本願寺聖人親鸞にしても、法然とのつなぎ目に聖覚法印の存在を否定しつくせぬであらう。

聖覚法印が寂したのは嘉禎元年（一二三五）の三月五日であつたか。その旬日前の二月二十一日、藤原定家は安居院の房を訪れた模様を「明月記」でこう書いている。

寝所ノ前ニ入ル。逐日無力庭弱、起チ揚ル能ハザル由言談。猶、ソノ詞多シ。……（略）……濁世ノ富楼那遂ニ遷化ノ期ヲナスト言エリ。実ニ是レ道ノ滅亡スルカ。悲シミテ余リアリ。今年六十九云々ト。先師七十八ノ由述べラル。碩学能説、今ニオイテ断絶スルカ

そして三月五日の項では、

昏ニ臨ミテ北隣リノ僧院聖法印遂ニ事切レ給ウト
云々。日頃聞クト雖モ臨ムニ由無シ。悲シミテ余
リアリ

と追悼している。

濁世の富楼那——最上級の讃称であろう。

その聖覚法印の死と、明くる嘉禎二年の九月石州へ走
って記主禪師の良忠に出廬を促した生仏とどう結びつく
のであろうか。その詮索の前にまず生仏と聖覚との関係
を考えてみる必要がある。

二

聖覚法印は父澄憲の第三子である。

澄憲は一代の大唱導師だったが、天台僧としては独特
な道をえらんだ。晩年になって妻帯し次々と子をなし
た。十男一女だったと言われる。

非難の世評には胸を張って「わしの優秀な血を一代だ
けで」途絶えさせるにしのびない、と抗弁したらしい。

果たせるかな九人の男児はいずれも真言、天台の学匠と
なり、とりわけ聖覚は父をも凌ぐ大唱導師となった。

濁世の富楼那尊者、「聞ク者、涙デ袖ヲ絞ル」とうた
われた聖覚説法の内容は何だったのであろうか。

父の澄憲もそうだが、安居院流説教の特色は、美文名
調子だった。「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり」
有名な「平家物語」の書き出しは安居院流そのものの、と
説教史の研究者関山和夫氏は断じている。

聖覚が語る内容は平家没落の話題が多かったと言われ
る。当然、法然の説教を受けて安心立命した三位中将重
衡の悲話などは「涙デ袖ヲ」絞らせるには絶好だったで
あろう。

「平家物語」の作者について、兼好法師は「徒然草」で、

行長入道、平家物語ヲ作りテ、生仏ト言イケル旨
目ニ教エテ語ラセケリ

とする。

行長は法然とは黒谷以来の法兄弟だった法蓮房信空の
実弟である。彼の作者説に疑問を抱て近代の学究はこの

前文を問題視したがる。

慈鎮和尚、一芸アル者ヲ下部マデモ召シオキテ
不便ニセサセ給イケレバ、コノ信濃入道ヲ扶持シ
給イケリ

慈鎮(慈円)和尚をスボンサーにしていた信濃前司行長(官名は前ノ下野守の誤りらしい)が、法然義を唱導しているような「平家物語」を書くはずがない、という論法である。「愚管抄」であれば法然や専修念仏を罵倒した慈鎮ではないか。

しかし慈鎮の立場、考え方はつねに流動的であった。とりわけ「専修嫌い」になったのは、同じ法然門下の証空らと接近してからのことであるし、彼自身の保身とも密接に関連したであろう。法然が年とともに尖鋭的に専修化したことを罵ったので、広義の念仏思想を否定したのではなかった。現に慈鎮は死に臨んで念仏者証空を善知識にえらんでいる。

作者が行長入道であっても、いっこうに差支えない。そして、盲目の生仏が琵琶物語をとおして大衆の間へ弘

めていったのであろう。その潤色過程で唐善導和尚の「六時礼讃」や「法事讃」も採り入れたであらう。

現在の文学作品と異なり、日記文学は別として当時の物語が複数者の手に成ったことは、むしろ常識であろう。「平家物語」は、法然を取り巻く念仏ひじりたちが作った、と言いつても壘断にはなるまい。

それはともかく説法の壇上から平家哀話を語ってきた聖覚法印と、その制作者の立場にいた生仏との関係が如何に密接だったかは、容易に推量し得るであらう。

法然義の嫡系を求めて、聖覚法印の寂後、生仏が鎮西の弁長を目ざしたことは理解できる。当惑するのは、なぜ石州多陀寺に記主禪師を訪ねたか、そこである。宗門的な言い方をすれば、記主禪師良忠はなぜ浄土宗の三祖に指名されたのであろうか。

作家武田泰淳氏の実父である大島泰信氏は「浄土宗史」でこの局面を次のように誌している。

——嘉禎二年九月、生仏法師は三祖の隠棲を訪いぬ。

此行、善光寺如来の敕告によりて、筑紫善導寺に赴き、二祖に浄土の宗義を諮決するにあることを語

る。生仏の如何なる人物なりしかは不明なるも、三祖と安心問題に関し、深契ありたる人なること疑うべからず。然らずんば信州より鎮西に赴くに、態々（わざわざ）石見に立寄るべけんや

まさしく「深契」かなければ、生仏はわざわざ石見に立寄って記主禪師に出廬を促すはずがない。では、その「深契」とは何だったのであろうか。

道光の三祖記主伝である「然阿上人伝」に、

——宝治二年戊申、春上リテ帝里ニ在リ。尼淨意ノ請ニ由リテ選択集ヲ講ズ。淨意曰ク我昔故法印之義ヲ聞ク。今ノ義勢、先聞ニ違ワザル也

こんな記事がある。

尼淨意とは聖覚法印の妹である。十男一女だった澄憲の、その一女であらう。

宝治二年（一二四七）は記主良忠が生仏に促され、筑紫に赴いて弁長のもとで学んでから十年後にあたる。その十年間は安芸と郷里の石見を往復し、不明だった時代

だ、と同じ伝は書く。

ところで玉山成元氏が「芸術浄土」に発表した良曉（白旗上人）への記主禪師の譲り状によると「定阿尼ヲ以テ母ト為シ、舎弟等ヲ以テ子ト思イ、孝ヲ尽シ、哀レヲ重ルベシ」と頼みこんでいる。

つまり良曉は先妻の子であって、自分の死後、現在の妻や異母弟たちの面倒をみて欲しい、というわけである。日付は文永九年正月十六日である。記主は七十四歳になっている。伝によれば記主と良曉とは五十三の年齢差があったという。これに従えば、この年良曉は二十三歳である。父が大病を患ったと知らされて、修学中の比叡山南谷から鎌倉へ駆けつけたものだ。

現在の妻定阿尼や舎弟たちは何処にいたのであろうか。記主が最初に関東へ根をおろした下総あたりだったかも知れない。

とにかく良曉は、そのまま父のもとに居着く。七年間みっしりと念仏の附法を受ける。おそらくその間に継母定阿尼や異母弟たちとも交流したであらう。「母ト為シ、子ト思ツテ」肉縁の愛をわかち合ったことでもあらう。やがて記主禪師が老軀に鞭打って上京した折は、立派に

＜鎌倉小景＞



鎌倉の留守居役も勤めるのであった。

さて良暁の鎌倉下向を二十三歳時として、この年齢から逆算すると、彼の誕生は建長元年（一二四九）になる。記主が中国地方から上洛し、聖覚法印の妹浄意尼に「撰択集」を講じた翌年にあたる。

——浄意、頭ヲ傾ケテ洛中ニ居スルコトヲ請フ。即チ契ツテ諸檀施主ヲ以テ、期シテ浄土ノ弘法ヲ以テ……

気のせいかな、「然阿上人伝」のこのくだり、筆に潤おいが沁みているようでもある。浄意の懇請は浄土の弘法のために諸檀施主を集めることを誓うのであるが、記主との別離を悲しむ風情が行間になじんでいる。

だが、記主は浄意の手を振り切って信濃善光寺へ旅立ってゆく。その信濃から翌建長二年には下総入りを果たし、千葉一族の支持を得て念仏教化の基礎固めをする。

良暁、白旗上人の生母とは、じつはこの浄意尼ではなかったのだろうか。

聖覚の父である澄憲法印が寂したのは建仁三年（一二

○三である。淨意尼がその最晩年の娘だったとしても、宝治二年には四十六歳になるか。子を産むには晩年に過ぎるであろう。

ただし、この年齢計算、すべてが記主と良暁の年齢五十三という前提から発している。じつはこの差は開き過ぎる気がする。

と言うのは、記主が後妻の定阿尼にいつ子供を作ったか不明であるにしても、推定からは下総時代であろう。まさか將軍のお膝元鎌倉で妻帯したまま僧でござる、とは言いかねまい。

記主禪師が下総に在地したのは建長二年（一二五〇）から正元元年（一二五九）の九年間であった。この期間に定阿尼とのあいだに子をなしていたとすれば、建長元年生まれの良暁とは殆んど年齢が開いていないことになる。二十三歳の兄が十五、六歳の異母弟を「子ト思イ」は余りにも不自然である。

良暁の誕生年を十年ないし十五年さかのぼらせれば、三十数歳の大人が十五、六歳の少年を我が子と思うのはおかしくない。

十年さかのぼらせると、嘉禎三年だ。さらに数年を加

算したら、聖覚法印の在世中となる。当然、その妹淨意尼は三十二、三歳。記主自身は三十五、六歳であろう。

聖覚法印が寂したとき、生仏は法然義の直系後継者を誰にしようか、悩んだにちがいない。鎮西の聖光房弁長を二祖とすることには文句がない。その次である。弁長もすでに七十歳を越えているからだ。

聖覚法印の義弟にあたる記主禪師こそ最適な法嗣ではないであろうか。

おそらくその当時、淨意尼は十歳ぐらいの良暁を抱えて都に住んでいたにちがいない。夫記主の行方は判明せず、あまねく手をまわして探がしたことであろう。

やっと探がしあてたのが石見の多陀寺だった、ということになる。

このあと淨意尼はわが子を比叡山へ出家させ、自らも剃髪して大覚寺入りを遂げた、と思われる。

三

前に触れた大島泰信氏の「浄土宗史」は、記主禪師から白旗上人良暁への附屬伝法に疑問を投げかけている。

記主には性心、尊観、礼阿、慈心らのすぐれた高弟が

実在していたのに、なぜ年若い良暁をえらんだのであろうか。

——或いは云う。良暁は三祖の肉弟なり。血肉の関係上、愛顧諸弟に異なりしかば、慈心は前に附法せられ、伝具までも授与せられたるにかかわらず、之を返却して良暁に与えられんことを謂えりと。然れども法門の授受には決してさる私情偏頗を許すべきに非ず。三祖の賢明なる又、決してかかる処置に出づべき人に非ず

ましてや記主と良暁とは五十三の年齢差もあり、如何に記主の父親円尊が長寿で精力絶倫だとしても兩人の父親とはなり得ない、として肉弟説を否定している。

大島氏がこれを書いた時点（大正十二年）良暁が記主の実子であった事実は知られていなかったのであらうか。何者か、何者たちかの手によって隠蔽が続けてきたのであろうか。

「浄土宗史」で大島氏は「決してかかる処置に出づべき人に非ず」と記主を護立するが、ではなぜ良暁に衣鉢

を継承させたか、となると途端に渋滞してしまふ。良暁は年齢や学殖において諸高弟に遠く及ばなかったが性温順であった。識見高邁というほどではないが「思想穩健」——

性温順、思想穩健だけで法然、弁長、良忠と相伝してきた九条袈裟や松影の硯など共に宗脈を授ける理由になるであらうか。

ここで、もう一度記主禪師の「譲り状」を点検し直してみる必要がある。

最初の文永九年の文章だが、記主が重病にかかって京都から良暁が駆けつけた折に誌したものである。

この「譲り状」では、明確に良暁をわが子であるとし、現在の佐介谷悟真寺とそれに付属する寺領の守護人として指定する内容である。

この田地は故武州前ノ判史追善のために寄進されたもので、自分は未だその「追修」をやり終えていない。だから自分の死後は良暁に継続させる、というのである。

もう一通の弘安九年、つまり記主が寂する前年の文章はがらり一変している。良暁をば「一流之大徳」と呼び、正当な伝法者と認め、これに反対となえる門弟は

「相伝ノ義ニ非ズ」ときめつける。

文永九年から弘安九年、この十四年間の修法、研鑽で記主には良暁が充分に衣鉢を継承できる「一流之大徳」になった、と判断し得たのであろう。

ただし、この判断時にも記主と良暁の年齢差が五十三がひっかかってくる。三十七歳では、いくら晶眉目に見ても一流之大徳とは言い惜しかったであらう。記主自身が石州の多陀寺にて、生仏に促されて鎮西へ赴いた年ごろである。それからの研学であり、説法教化の実践であった。父子の年齢差が十年ないし十五年短縮されてこそ、すべての誤解が薄れるであらう。

ちなみに白旗上人良暁の寂年は伝によってまちまちである。当然、誕生年も定かではない。

記主禪師が血縁相承を断行した点について、しかもそれに遅疑峻巡しないばかりか「門弟中、此ノ義勢ニ違背セシムル者ハ、相伝ノ義ニ非ズ」と言い切った立場や心情も分析してみなければなるまい。ただスケールの大きな念仏者だったから、では済まされないであらう。

まず第一に考えられることは、わが身がなぜ鎮西上人から法然義の正統を継承したか、記主がそこへ思いをめぐらしたときである。聖覚法印との肉縁がその理由だとしたら、迷ったり遠慮するわけがない。

しかも、第二に考えられる法然義の本質が血縁相承を否定しているかどうか。そこへ思いを究めていささかも誤りではない、と確信されたらなおさらのことであらう。

法然は妻を持つ可否について、あくまでも「念仏により励み得る」条件を優先させている。妻子をたくわえても、まずその妻子を立派な念仏者に教化し、共に励めば、孤立したまま我れ一人聖し高し、とうそぶく法師ばらよりは遙かにすぐれた仏徒とする。

仏力無窮ナリ。罪障深重ノミヲオモシトセズ。仏智無辺ナリ。散乱放逸ノ者ヲ捨ツルコトナシ。信心ヲ要トス。ソノホカ願ザルナリ

聖覚法師も「唯信鈔」で言い切っているではないか。しかもこの決断は、師法然からじかに、鎮西の聖光房弁長と兩人だけで受法したものではないか。

この確認があったればこそ記主禪師は、寛治二年久々

で淨意尼と再会したとき、「選択集」を彼女に附法し、有力な念仏者に教化するのである。

記主禪師が鎌倉入りをしたころ、すでにこの武人の街には多くの念仏者がはいりこんでいた。執権北条氏をはじめ、念仏を信仰する武士は多かった。

しかし、その先人たちが説く念仏はどうであったか、やれ諸行本願義だ、西山義だ、多念義だ、とせせこましいセクショナリズムで信者の争奪をくり返していたにちがいない。

記主は彼らと合流せず、小さな家を作り、下総から伴ってきた信者の雑人たちに商いをさせたりして生活の基盤を固めつつ念仏教化に励んだ、と言われる。やがて大仏朝直という檀越にめぐり遇い、佐介谷に悟真寺を建立してもらったわけだが、わが生き方こそ面受の機会には恵まれなかったが先師法然の教旨に寸分もたがわぬ、と確信し得たことであらう。

ところで記主禪師の生き方が、親鸞のそれと酷似している点にわれわれは気づかされる。「信不退」を標榜する以上、どちらも立派な念仏ひじりだったことは言を俟つまい。

だが後世の評者は親鸞像のみを巨視化し、記主禪師を見忘れがちである。親鸞の遺文が人口に膾炙した点にもよるであらう。また記主の法灯を継承した人々が、ことさらに聖道門的潔癖さで記主の人間像を部分としてしか見ようとしなかったためでもある。

一点でだけ、記主が親鸞よりすぐれた姿を明らかにしておきたい。正しい法然義が、妻子をたくわえることを許す条件として、他よりもまずわが身内の教化を先決とする。記主はわが子良暁を一流の大徳、すぐれた念仏者に教化しおえた。親鸞はどうであったか。その子善鸞は邪法をまぎ散らし、義絶しなくてはならなくなったのである。

文学的には興味深い素材であるが、宗教者としての親鸞に何か一つ欠けるものがあつた、と断じたいのである。

法然が、聖覚法印や弁長との対話において、善導和尚の三心味得を否定のなかで肯定し、肯定のなかで否定もしたあの深い態度が、親鸞に果して通じていたかどうか。

二 編集後記 二

○「柱のきずは おとしの 五月五日の 背くらべ」——幼ない頃の歌声を耳の奥に聞きながら、鯉のぼりの風にたゆたうさまを見る。吹き流しが流れる彼方の大空は、昔も今も変わらない。五月の空の青さと、山の縁の新しさが、心の中のうやむやを洗い清める。すがすがしい晴天に恵まれた「子供の日」、わたしは過ぎ去りしわが童心に呼びかけて、初心に還るべく発心する。

子供の日小さくなりし靴いくつ 翔

老父母と共に暮せる子供の日 ゆう一

○本月号も「善導大師一千三百年遠忌慶讃記念号」として、読者諸兄にお送りする次第である。一宗を挙げての善導大師への追思追慕の情が、意義の多いたくさんの方の企画の中で実行され、善導大師の遺された浄土信仰への篤い想いが、法縁を結ばれた多くの善男善女の心の中に実ったのは、まことに喜ばしいことであつた。大師讃仰への強い信念をますます募らせて、私たちの日々の暮らしの中の実際の精進として生かして行きたい。

○さて、誌上においてもすでに紹介してもいるが、弊会同人の村瀬秀雄先生（小田原市常念寺住職）の「和訳シリーズ」に、このたび新たに『和訳善導大師六時礼讃』（B6判、二六五頁、価二四〇〇円）の一書が加えられ、好評の『和訳浄土三部経』、『和訳善導大師親経四帖疏』、『和訳法然上人選択集』と合わせて、浄土宗主要聖典の和訳作業が、ほぼ出揃ったわけである。多年に渡る村瀬先生の労作が、ここに見事に整備され、上製函入の外装もさることながら、和訳、注釈作業の内容における体裁も、よく統一された好便なシリーズとしてまとまったわけである。どうか善導大師一千三百年の慶祝にちなんで、多くの読者諸兄がこの村瀬先生の労作シリーズを求められんことを期待したい。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

（送料不要）

浄土 四十六巻 五月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十五年 四月二十五日 印刷
昭和五十五年 五月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八二八七番

大 東 出 版 社

浄土宗学侶待望の覆刻

『浄 土 学』（全八巻）

大 正 大 学 浄 土 学 研 究 会 編

A 5 判上製 各巻平均 600 頁 限定 300 部刊

昭和55年4月より隔月刊行

第一巻 定価 12,000 円

—— 予 約 申 込 み 受 付 中 ——

◎大正大学浄土学研究会編『浄土学』（第一～二十九輯）を善導大師一千三百年ご遠忌奉讃の一環として、全八巻にまとめ覆刻再刊致します。『浄土学』は宗教大学時代の研究誌『無礙光』を継承し、昭和五年三月に創刊された研究誌で、浄土宗学はもとより、広く浄土教に関する諸論攷を収載しています。今回の再刊に際し、各巻末に執筆者の紹介を、第八巻には新たに「浄土学関係雑誌論文目録」を付し、研究者の便益を計りました。

このたびの再刊が『浄土学』全巻を入手し得る最後の機会となります。お早目にご予約申込み下さい。

＜詳細内容案内謹呈＞

〒 113 東京都文京区白山 1-37-10

TEL 03 (816) 7 6 0 7

振 替 (東京) 3-5 7 2 0 7